小金井雑学大学だより

第１７号　　平成２２年１月

体験の豊かさを

東京学芸大学学長　鷲山　恭彦

最近、歳のせいか昔のことをよく思い出す。中学校に入ったとき、受け持ちの町野孝先生は三つのことを言われた。「中学生になったのだから、勉強は二時間はしないといけないな」「本当の友達ができる時だ。友達を沢山つくれよ」「働くことは最も大切なことだ。帰ったら家の仕事をよく手伝え」と。

今は掛川市に属しているが、土方村というド田舎に育って、山や川で遊んでばかりいてロクに勉強しなかったから、二時間と聞いて気が遠くなった。しかし、次第に知的好奇心も湧いて勉強するようになったし、親友も多くできた。家では田植え、稲刈りなど、労働によって体で覚えることも学んだ。今思うと、中学生活のポイントという以上に人生の大切な核心を教えていただいたような気がする。

何故こんなことを思い出したかというと、昨年の雑学大学の講義でも話したことだが、「教員採用試験の成績はよかった。面接も好印象でクリアした。しかし、実際にクラスを受け持ったら学級崩壊になった」という新卒学生の話をよく聞くからである。

最近の学生は、知識と情報だけはあるが、実際体験に結びついていない。体験から知恵へのプロセスがない。客観的現実と本当に格闘したことがないから、みんな自己中心で、人の心が判らず掴めず、臨機応変のクラス運営もできない。生活体験が不足しているのだ。

生きる力の基本は勘である。魚を追い、川の深みにはまり、鎌で怪我をし、といった経験の総体から勘は生まれ、判断力が育つ。感ずる心、危険の察知、対応への知恵がここから生まれ、人の振る舞いをつくり、価値観を育くむ。体験は人間性と社会性への扉である。

学生にはなるべく多くの体験をしてもらおうと常に思ってきた。『北の国から』『風のガーデン』などで知られる劇作家の倉本聡さんと札幌での講演でご一緒した。自然塾をやっておられるという。どうぞと言われ、今年九月に学生を四十名ほど送った。みんな生き生きとして帰ってきた。倉本さんの「富良野自然塾」との提携が始まった。

武蔵小金井には『次郎物語』で知られた下村湖人の浴恩館がある。昔、湖人が青年団運動にかかわり、ここで塾風の教育を行

った。宿泊の集団生活の中での討論と思索である。知識や情報も、人間と社会と自然の中に生身の等身大の形であらためて置きなおされ、検討され、体験によって濾過されて初めて生きたものとなる。情報化社会、便利社会、効率社会になってしまっただけに、生き生きとした本物の体験を多彩に復権したいし、体験を継承し共有する形がもっともっとあっていい。

講義をしながら、参加された皆さんを拝見して、小金井雑学大学にはそうした側面も豊かにもっておられるように感じた。何より学長の富永一矢さんは、俳優座の支配人をされ、俳優も演出もされた演劇の実践家である。体験教育の権化である。本学の客員教授もお願いしている。小金井雑学大学とのジョイントで何か出来ないか、今後の課題である。

十周年記念
その後の雑学大学の状況

代表理事　村杉　清和

雑学大学が開校されてから、一回の休講もせずに昨年十周年を迎えて早くも一年が経過しました。その間の状況をご紹介いたします。

一、受講者が増える傾向にあります

1、「小金井雑学大学十周年記念誌」でご紹介しましたとおり、過去の講義の平均出席者数は約５２名でした。それが十周年を経た此の一年間の講義毎の平均出席者数は、約６３名で確実に１０名も増加の傾向がみられます。

内容としましては、新規来校の方が毎回二桁多く来られており、大きな変化だと受け止めています。

2、アンケートの声から・・・

○高齢者の学び好きに驚き、死ぬまで勉強と言うことを見させていただいている気がします。

○この盛況、小金井市民の問題意識の高さに感心しました。

○向学心にもえている仲間、此処に同席して居られることに悦びを感じています。

第 255 回講義　4 月 19 日

※受講者の方々の真摯な雰囲気が常に感じられて、地域に市民独自の生涯学習活動が広がることが、地域社会の生活レベルの向上に繋がって

生涯学習　―励む悦び
生活の刺激　―受ける悦び
ライフワーク―充実した悦び

日常生活の悦びに全てが良い方向に連鎖反応を起こしていると感じています。

二、講座、展開の特長

1、六月の第一週「死とどう向き合うか」、第三週「大道芸七転び八起き」を展開。

広辞苑で「雑学とは＝雑多な物事・方面にわたる系統立っていない学問・知識」とあります。まさに、雑学の面目躍如なものがあって受講者の共鳴を得られたものと思っています。

2、十一月の第一週「老いて楽しく暮す」は吉沢久子教授の

豊かな体験を〝対談形式〟で引き出す試みをしまして、その新鮮な結果から今後とも新しい運営の展開を摸索いたします。

3、国際ロータリ第２７５０地区「東京小金井さくらロータリクラブ」との初めての共催講義を実施しました。

4、小金井市では行政や事業の内容、暮らしの安全知識を市民に情報提供の目的で「まなびあい出前講座」に取り組んでいます。目的に呼応して年に一回は共同で開講していく考えです。

※雑学大学は名の如くに、展開される講義内容は豊かで変化に富んでいて、此のテーマの多彩さ〝らしさ〟が雑学大学の今後の飛躍の可能性を秘めている要素ではないかと考えています。

三、今後の取り組みについて

年齢、社会的な経験が異なる多様な不特定な人達が集う自由な生涯学習の場には、具体的なことを学ぶ以外に、多様な人々に接することが生活の刺激を受け、より良いライフワークを送れるのではないでしょうか。心から楽しむ時間を共有する場に育てたいと考えています。

更に雑学大学の次の展開としましては特にＩＴ技術を駆使していく面、また開講以来実に１６０名の教授をお迎えしたと言うこの貴重な体験・実績を“宝”としてこれまで培ったノウハウを生かして、更に地域の中での役割を確かなものにしていく為に、新たな充実した活動の構想をすすめていきたいと思っています。

今後とも、ご理解とご支援をよろしくお願い致します。

新たな目標に向け

総合調整役理事　五十嵐京子

戦後、行政が社会教育を推進していた時代から６０年余り。社会教育から生涯学習へと変わり、運営の主体が長い時間をかけて官から民へと移り変わってきたように思います。小金井雑学大学は市民主導で地域の生涯学習の一翼を担ってきました。雑学大学を作ってきたのは、講師だけでなく受講生も含めての多くの地域住民です。

そして、時代の流れは、文化もスポーツも福祉も街づくりにも住民の知恵と力を必要とするようになってきました。法人格を取得し、社会での認知度を確かなものにして、様々な分野で多くの市民が活動しています。地域がそうした人々によって作られる時代になってきました。

今理事会では、小金井雑学大学の１１年余りの実績と培ったノウハウを生かし、さらに地域での生涯学習推進のために法人格を得ることを検討しています。そして、例えば講師陣の力を借りての講師紹介、新たな講師発掘のための講師育成など新事業の展開を考えているところです。今後とも地域の学習力アップのため多くの皆様のご協力をお願い申し上げます。

１２周年記念講演

「疾風怒濤の長寿社会を生き切る」

高見澤たか子氏（評論家・ノンフィクション作家）

3 月 21 日（日）午後 2～3 時

小金井市民会館（商工会館）

ことわざと「かるた」

吉沢　久子

小金井にうかがったときにも、「からす」がことわざの中によく出てくる話をしましたが、むかしの日本人は、日常会話にも上手にことわざを入れていたと思います。

たまたま、食とことわざについて調べる必要があって「ことわざ新辞典」を読んでいたら、いろいろ面白いことに出会いました。

たとえば「犬棒かるた」といわれる、ことわざ集のようないろはがるたについて、こんなことが書かれていました。いろはがるたは文化文政のころに京都ではじまったのだそうで、それが関東に伝わり、しだいに全国にひろまったのだとか。だから上方と東京とは違いがあり、「論より証拠」が東京で、「論語読みの論語知らず」が上方、どちらもことわざとしてはよく知られています。したがって、上方かるたに取り込まれていることわざの方が古いものだといえましょう。

ことわざそのものに土地による特徴はありませんが、たしかに上方と東京は違います。

少し例をあげれば、「月とすっぽん」が東京で、「月夜に釜をぬく」が上方、「犬も歩けば棒にあたる」が東京で、「石の上にも三年」は上方、こんなふうに分けて並べてみると、どちらにしても、新年の遊びにことわざを並べたかるたとりで、たのしみながらおぼえこませるとは、うまいことを考えたものです。

私の祖母などは、何かというと、

「猿も木から落ちるというように、あんまり得意になると、しまったという失敗をするものなんだよ」

とか、

「楽あれば苦あり、ってね。人間いいことばかりあると思っちゃいけないものだよ」

などと、わけもわからない私にいいきかせていましたが、子供の正月遊びにいろはがるたを取り入れたとは、何とも上手な生活教育でもあったと思いました。

これも、日本人のちえといえるのかもしれないと私は思いました。

第 268 回講義　11 月 1 日

役員紹介

学　長　富永　一矢
代表理事　村杉　清和
総合調整役　五十嵐京子
理事　須知正度　小野郁夫
中村正勝　成瀬　傳
成瀬和美　池田達也
田中留美子

編集後記

今年度の教授の鷲山さん、吉沢さんに原稿をお願いしました。お忙しいところありがとうございました。

雑学大学では、今年もさまざまなテーマで、楽しい講義を企画して、皆様をお待ちしております。

（田中　留美子記）

発行責任者　村杉　清和
小金井市中町×-××-××
TEL ０４２・×××・××××